

Title	斯道文庫所在林羅山自筆書簡筆跡類について
Sub Title	On autographic letters and calligraphy works of Hayashi Razan housed in Shido Bunko
Author	堀川, 貴司(Horikawa, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.2 (2022. 12) ,p.1 (256)- 17 (240)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	高橋智教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230002-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

斯道文庫所在林羅山自筆書簡筆跡類について

堀川 貴司

斯道文庫が所蔵または管理する林羅山（一五八三—一六五七）の自筆の漢詩文や書簡を順不同でまとめて紹介する。翻刻に際しては、通行字体を用い、句読点を加えた。

一 随筆四十六則 正保元年（一六四四）写 092
101

卷子本一軸。後補金茶地浅葱違い宝卷（巻物を交差させて配置し、菱繋のようにしたもの）木瓜文緞子表紙、三二・八×二七・四糎、無辺浅葱無地絹題簽に墨書「随筆四十六則（林羅山自筆原本）」。軸頭欠。見返鳥の子布目型押金揉箔散らし。料紙は薄茶色楮打紙六枚継、紙高一八・九糎、紙幅は順に一三九・一、一四一・九、一四二・一、一四一・九、一三四・五、一・二、合計七〇〇・七糎。なお、第六紙は文字にかかっていない。後遊紙（料紙の覆輪と同じ紙）四八・八糎。

内題はなく、内容より判断して命名したと思われる外題をそのまま書名としている。

第一紙冒頭は二行分ほどの余白があつて書き始められ、第三紙と第四紙の継目には文字が懸かっている。後述するように羅山の文集で連続している文章がそのまま記されており、欠脱等はなく、執筆当時の状態を保存していると見られる。なお、第一紙と第五紙とが他の三紙よりやや短いのは、卷子本に仕立てる時に化粧裁したためか。第五紙はぎりぎりまで切つ

てしまったため、第六紙を継いで体裁を整えたか。その第五紙末尾に落款「甲申之冬 羅浮老夫書」が存することにより、甲申正保元年（一六四四）の成立とわかる。署名下部に落款印らしきものの擦消跡があり、右脇に落款印には使わない縦長の「夕顔巷」印が捺されているのが気になるが、筆跡等に不自然なところはなく、何らかの事情で羅山自身が印を変更したのかもしれない。

表紙題簽の下方に貼紙墨書「第壹号」とあるのは、あるいは林家所蔵時代のものか。桐印籠造箱入り、蓋表に打付墨書「隨筆四十六則（林羅山自筆原本／正保元年成）」、身手前に貼紙墨書「羅山筆／隨筆」とあるのは、題簽の筆跡と同様、森銃三の筆かと思われ、弘文荘が取り扱ったものと推定されるが、『弘文荘待買古書目』には見当たらず、斯道文庫が購入したのは一九九七年、一誠堂書店からである。なお、本文各条冒頭の上、覆輪部分に鉛筆で一から四十六までの数字が記されているのは、全部で何条あるかを数えてこの書名を命名した弘文荘の手になるものであろう。

羅山の文集『羅山林先生文集』七五巻のうち巻六十五から七十五までの一一巻は「隨筆」と題され、読書ノートとも随想とも言えるような内容である。¹

巻六十五末には「以上慶長年中之筆也」、巻六十六末には「此一巻慶長年中作」、巻六十七末には「此一巻壯年所作、別為一小冊号格物端緒」とあって、これらは文字通り羅山自身が筆に任せて記した隨筆である。巻六十八は個別にさまざま人物の求めに応じて書き与えたものを鷺峰が羅山の手控え等から集めているが、これも他動的ではあるものの、いわゆる隨筆と呼んでいいだろう。巻六十九も寛永年中、公務の暇に隨時書き溜めたもの、と鷺峰は記す。

しかし後半六巻は目的を異にする。巻七十二末に「右丁亥隨筆合三卷、所授男恕也」とあり、巻七十から七十二までの三巻は三男の鷺峰に授けたもので、丁亥正保四年（一六四七）の執筆である。さらに巻七十三末には「授男靖也」、巻七十五末には「戊子隨筆二卷、所授男靖也」とあって、七十三から七十五までの三巻は四男読耕齋に授けたもので、七十四・七十五は慶安元年（一六四八）の執筆である。

巻七十五末にはさらに万治二年（一六五九）鷺峰による跋が付され、明暦の大火で焼失したものを除き、羅山自筆本を編

集を加えずそのまま載せた、という。

さて本書は、読耕齋に与えたいうち年時不明の卷七十三、全七九条のうち第七条から第五十二条までの全四六条を記したものである。

内容は、冒頭に朱子の『小学』を賞賛し、ついで『孝経』および四書五経（2～16）、老莊・『楚辞』（17・18）『史記』『漢書』『後漢書』のいわゆる三史（19～21）、六朝・唐宋の詩文（22～33）、小学書その他（34～37）、文明論・人生論的な話題（38～41）、聯句（42）、氣と理をめぐる自然科学的な話題（43～46）と、漢籍の分類に従って整然と配置され、学者として学ぶべきことの指針となるよう配慮されている。

2の『御注孝経』、28の『白氏文集』については平安時代以来の受容にも触れる。10『毛詩』のように、古注をも読むべきだとする所もある。これらは、博士家の学問の継承という意識の発露と見られる。一方、23で陶淵明を「第一達磨」と呼んだり、杜甫・韓愈・柳宗元・蘇軾・黄庭堅を重視する姿勢は、五山における中国文学観を承けてのものである。これら羅山にとって、あるいは当時の日本儒学にとっての伝統を継承しつつも、冒頭に『小学』を、末尾に理氣論めいたものを置く構成自体、朱子学を規範とすべきことを示すものとなっている（むしろ版本卷七十三は、前後に他の条を付加したことによって、かえってそのような整った構成が見えにくくなってしまっている）。

こういった内容と、卷子本という形態とを併せ考えれば、林家の学問継承に関する一種の伝授書という意識で作られたものかもしれない。前年の寛永二〇年（一六四三）に嫡孫梅洞が生まれたことも契機になったか。

後に『本朝通鑑』編纂所である国史館を主宰した鴛峰は、寛文六年（一六六六）四月に、子弟養成のため経・史・文・詩・倭学の五科を立て、梅洞を左員長、人見竹洞（友元）を右員長、坂井漸軒（伯元）を左権員長、鳳岡を右権員長とする体制を整えた（『国史館日録』四月二十二日条）。経史とともに詩文を重んじる点や日本の歴史・文化を視野に入れる点などは、本書にも示された羅山の学問を、林家のみならず広く伝えようとする意識が見て取れる。

【翻刻】(各条冒頭に通し番号を付した)

1 朱子撰小学書、以為大學之基本。後學尊敬之、如神明如父母。故并四書号曰五書。
2 日本天子皇子、讀書始用御注孝經。是唐明皇所製也。而不如孔安國所傳之詳也。讀孝經、則須考朱子刊誤。
3 程子曰、大學一個腔子。々々謂軀殼也。一心管撰軀殼、聖人之心在此書。其誠意正心章可以見焉。一篇皆是心之全体大用也。

4 中庸字義、程朱尽之。漢唐人所云、不得其義。如賈生過秦論中之句、胡広之中庸、呂温之中庸、亦然。小人之反、中庸古本脫反字、故誤以為君子小人共有中庸。至于程朱既正焉。

5 論語開卷說學悅樂。所學何學、所悅何事、所樂何處。善說集註而后當識本文。庶乎書与我不可二也。

6 顏子不貳過。朱子曰、不萌於再。孔子曰、昭公知礼。又曰、丘過云々。孔子之過可貳乎、不貳乎。

7 孟子不動心与告子不動心、必有辨也。不可不揅焉。莫容易抹過可也。且養氣義外之說、宜注意亦可矣。且又夷之二本、儒者之一本、消得而佳。

8 四代聖賢之心、举在于書。生乎数千載之下、欲知其心、舍典謨訓誥誓命之格言、而何他求哉。恭惟千載心、秋月照寒水。

9 聖人不乏弟子、然可共言詩者、商賜而已。若非得之於言外、豈如是耶。与泥于訓故者、不易言。雖然多識鳥獸草木之名、則訓故亦不可廢。

10 毛公亦漢儒之醇而所受有之焉。而其伝甚略。鄭箋稍詳也。而其据識緯、不若毛之正也。孔氏疏兼解二義粗周覽、而後可用朱子集伝。

11 三礼之註解伝于今、則鄭玄之功也。其字義物名、足以徵之。至其微旨奧義、則鐘鼓玉帛云哉。三代之直道、周公之制作、皆布在此中。

12 易經上下篇、文王所定也。伏羲画卦又重之。或曰、文王重之。是所以先天後天之名立也。如乾元亨利貞之属、即是繇辭也。謂之彖。文王所係之詞也。如初九潛竜勿用之属、即是爻辭也。周公所係之詞也。如天行健地勢順之属、即是大象也。

謂一卦之象也。孔子所述也。如潛竜勿用陽在下也之屬，即是小象也。謂一爻之象也。孔子所述也。文言繫詞說卦序卦雜卦，皆是韋編三絕之所屬也。其積文王彖辭亦号曰彖。故漢儒合併經傳，則每辭首加彖曰二字。亦是孔子所贊也。大象以下所謂十翼也。〈画下所有下乾上乾之屬，先儒以為漢費直所加，或曰王弼所加。〉

13 本義曰、周世名易有變易交易之義、故名焉。洪邁曰、周遍變化之意。雖然周禮有三易之名、夏商周共謂之易、則邁說非是。

14 革卦已日、解者云、已、止也。或云、戊己日也。或云、辰巳日也。吁多岐亡羊、願定于一。

15 麟經有左公穀三傳。左氏說得七八分、猶如聽訟者以公案而裁之。故程子曰、以傳為案以經為斷。真至言也。又論者曰、左氏史學、公穀經學、并案可也。唐有啖助趙匡、宋有胡安國。皆把三傳以議于經有異有同。畢竟歸本於經。

16 左氏欲作春秋先撰國語、故其筆法相似。或曰、傳成以後記國語。故太史公云、左丘失明、厥有國語。

17 老子深遠、申韓淺險。以無為有、莊子之文也。以曲為直、戰國策之文也。

18 詩變有離騷。楚、大國也。有倚相說墳典索丘、有陳良及辛北遊學周孔之道。惜哉、其言語文字不傳於後世而楚詞共稱。

19 司馬子長撰史記、多据左傳札記戰國策楚漢春秋等。其余子長手筆也。故欲知子長文法者、以此而見之。

20 班固漢書多据史記、其武帝天漢以後、固之所撰。西漢二百余年之典故事蹟、備矣。

21 范曄後漢書多据東觀漢紀荀悅漢紀及華嶠謝承袁宏等書而述之歟。曄不及遷固、雖然其當時人之奏議表疏詞賦之類、皆載之。亦是東漢二百年間之事、可以觀焉。〈二十一史甚浩博、摘其要者、温公通鑑朱子綱目。〉

22 六朝文章、大抵駢四儷六。蕭統所選取猶然。其所有先秦兩漢三國司馬晉之詞人才子、既列于史傳、唯所有詩誠風雅之羽翼也。欲見古詩者可由是。

23 淵明、採菊東籬下、悠然見南山、評者推為第一達磨。其他論詩者、譬諸參禪、或比臨濟家、或比曹洞家、或比雲門家。然則淵明超出五家六宗者乎。

24 淵明閑情賦、譬如蘇屬國娶胡婦乎。真是人倫之所欲也。豈理外哉。詩列國風多男女之事也。下此則宋庠平有梅花賦。

25 淵明性閑靖，其語淡簡高妙。然其豪放，於咏荊軻而見之，朱文公已覷破了。其不淫于老妪，於攢眉于蓮社而見之。其教戒，於告儼等而見之。其不怕死生，於自祭文而觀之。所謂乘化而帰尽，亦復如是。其不求富貴，於辞斗米而觀之。其不仕于劉宋，不受檀道濟之梁肉，託桃花源于栗里使劉氏不知其路之類，皆可以觀其清風芳韻。庸詎識今之不為無懷葛天之古哉。庸詎識松下之不為義上哉。庸詎識東籬北窓之不為典午山河哉。

26 唐初，以王楊盧駱之傑然，未免輕薄之晒，独有陳子昂拔其群。逮開天之際，李太白杜子美擅風騷之美。可謂盛大矣。李杜全集到今家々戶々有之，然能誦者不多。

27 韓柳所以善属文章，皆以本于六經故也。韓云，麟之為靈，咏于詩，書于春秋，雜出伝記百家之書。是麟一事耳。先援詩与春秋，次参用伝記百家。其他皆然。且進学解所云云，李漢序所云々，亦是莫不本於經。柳之与章中立書，論為文之法，復莫不参考之六經。宜哉，此二子為文章冠冕，而韓優乎。

28 日本旧時，博士秀才皆誦白氏文集。故其語句多引之，且詠倭歌者亦用其趣。有云，白氏第一第二帙常可握翫。就中秦中吟新樂府長恨歌琵琶行之類，人々諳誦之。雖然，比之李杜韓柳，大有逕庭。東坡謂之俗，宜哉。雖然，其間有閑適，有洒落，有真率，有知足之樂，有懼罪之戒，不可廢也。頃閱南邨之說郭，載楊妃伝，未有術士見玄宗念妃而迷，乃詐造妃像，夜令玄宗密窺之如真，玄宗愈惑眩。又見唐詩解長恨歌有云，花鈿委地無人収，蓋當時絞于馬嵬，時有人拾其鈿者，道士得之以為逢妃于仙島之信，帝之昏迷甚矣。楊妃之襪已出於世上，則鈿釵搔頭之類入于幻土手，必矣。漢李少君之術，亦可以觀焉。

29 歐陽永叔修唐書，撰五代史，世以為司馬遷以來有此編修。其外文章，不用奇字，最為平易，實宋朝一代大家也。

30 蘇老泉初説論孟，譬如鏖戰一陣。數年以後作為文章，其名伝於京師。若匪由論孟，何以至此哉。彼於理義雖未得之，然悟文法于論孟。

31 東坡之文章，平日習聞於乃父，變雄渾為盛壯，變奇譎為波瀾，誠是大辯大胆也。後來深染老仏，且步驟莊騷。其詩初慕李白，後來追和陶詩，遂与歐公齊名。而論者惜其不修史。若使涉史筆，則与韓之順宗実録，歐之五代史，果如何哉。

32 穎浜有云、讀檀弓悟作文之法。

33 山谷後山共學杜老。谷之有庶、如杜之有審言、頗揚家風。後山遊蘇門、與四學士相接相唱和。蘇有盛名、善遇後山。々々曰、向來一瓣香、敬為曾南豐。其不忘師不徒蘇也。義人哉。其文優於谷乎。

34 訓詁本乎爾雅、有広雅、有小爾雅、有埤雅、有爾雅翼。

35 六書本乎說文、有玉篇、有広韻、有竜龜手鑑、有礼部韻、有韻會、有古今法帖、有篆韻。至于皇明、韻書多出無數。

36 古之表疏見於史漢、後世例用駢儷、謂之播芳。有宋播芳、有元播芳。

37 李太白居草堂、号其集曰草堂集。々々中多樂府歌曲、故後人呼小詞為草堂詩余。

38 夷狄之樂曲、未必鄙俚、未必侏離、其間有中国所無者。蓋周衰魯乱、如播鼗武入於漢、少師陽擊磬襄入於海。々々、海島也。焉知其後流落不赴夷狄哉。是以料之、惠遠家有毛詩、僧肇說採莊老之言、不可誣乎。

39 素問雖戰國之書、往々有嘉言。亦是好文字也。故古人論文則有援用此書者。其說天地則岐伯曰、大氣拳之也。朱子剛風之說、即是大氣也。氣者、風也。莊子所謂大塊噫氣曰風、是也。氣息属風、所謂詞氣、所謂屏氣、皆息風也。朱子解之云、氣者鼻息出入者也。又云、氣、声氣也。其用曰呼、曰吸、曰咽、曰吹、曰噓、曰响之類、皆氣也。易道陰陽、他書不道之、独素問多道之。然或指水火、或指寒熱、或指内外而言之、与易所道有所似有所異。是亦不可不知。

40 素富貴行乎富貴、如舜被袵衣二女媼若固有之、是也。素貧賤行乎貧賤、如舜之飯糗茹草若將終身、是也。素夷狄行乎夷狄、如蘇武十九年在匈奴而不屈、是也。素患難行乎患難、如文王囚羈里而演易、孔子阨陳蔡之而絃歌、是也。且富而好礼、貧而樂、不亦素行乎。言忠信行篤敬、雖蛮貊行矣。太伯仲雍往吳斷髮、不亦素行乎。周公逢浮言而赤舄几々、不亦素行乎。

41 梧桐月向懷中照、楊柳風來面上吹、是丈夫之襟懷乎。振衣千仞岡、濯足万里流、是丈夫之度量乎。山之含玉、淵之抱珠、是丈夫之蘊藉乎。清白而有所立志、是丈夫之風流乎。皆是貧賤不移、富貴不淫、威武不屈之一端也。

42 聯句久矣。昌黎為上、城南長、莎柵短。奚論長短哉。只挾其耦可也。

43 星火飛触身則必驚、是氣也。求艾而灸則必忍、是志也。以是可驗不動其心、可謂近取譬。

44 日本与中華、雖殊域然、在大瀛海上、而朝暉旭輝之所煥耀、洪波層瀾之所漲激、五行之秀、山川之靈、鍾於人物。故号曰君子之国。昔治教清明之世、才子智人輩出於間氣、豈讓異域乎。時有古今、理無古今。豪傑之士、雖無文王猶興起、故尚立志。

45 此心此理、準於東西南北海之遠、而皆同皆然。如熱而有焰、縱不曰火而果火也。寒而潤下者、縱不曰水而果水也。推一知万、誰人無此心。此心即是理之所寓也。故千万里之相去、千万歲之相先後、有聖人出則皆莫不協于一。

46 上天之載太極乎、無声無臭無極乎。未発之中、是寂然不動也。発而中節、是感而通天下之故也。(印「夕顔巷」)

甲申之冬 羅浮老夫書(印カ擦消)

二 林羅山筆詩懷紙 (寛永一九年(一六四二)写 セ133

本紙四二・二×六〇・四種。文政元年(二八一八)の大倉汲水、年代不明の大倉好齋の極札が附属する。また蓋裏に庚申 〓万延元年(一八六〇)の雨森白水(醉墨道人・敬亭)の識語(打付書)および「折記」(紙片貼付)がある。

羅山の生涯で閏九月があつたのは寛永一九年(一六四二)のみ。『羅山林先生詩集』卷二十五・月三に「壬午閏九月十三夜会脇淡牧亭」の題で収められる。「脇淡牧」は脇坂淡路守安元で、文雅の大名として知られる。羅山とはしばしば文学的交流を行い、安元が和歌を、羅山が詩を応酬したり、安元邸に会して詩歌会を開いたりしていた。この詩もそのような場で作られたものである。

九月十三夜は、八月十五夜とともに愛でるべき月夜として平安時代以来慣習となり、平安後期成立の『本朝無題詩』には漢詩作品も収められる。羅山の詩集には八月十五夜(およびその前後)と並んで、この日の詠が多数収められていて、王朝以来の伝統を継承しようという意識が感じられる。詩の内容は、九月九日の重陽の節句とこの十三夜とが一年に二回ずつ、合計四回訪れたことを、わざと語句を重複させて調子よく述べるもので、詩風は五山詩を継承する。なお、伝統的な詩懷紙の場合、題の次行に署名し、本文は一行九字または八字で続け書きし、最後第四行を三字にする、所謂三行三字が定型であ

るが、本作品は署名を末尾に置き、また本文は句ごとに改行しており、その慣習を守っていない。

【翻刻】(句ごとに改行し、読み下し文を付した)

閏九月十三夜

秋末閏余天一涯 秋の末の閏余 天の一涯

幾望佳月賞心加 望に幾ちかき佳月 賞心 加はる

重陽節去重陽後 重陽の節去りて重陽の後

四夜清光映菊花 四夜の清光 菊花に映ず(詩集、清を晴に作る)

夕顔巷道春(印「羅/山」)

三 林羅山七言絶句二首 慶安元年(一六四八)写 セ 134

本紙三七・〇×五五・〇禪。伝来は不明。

元旦に「試筆」と称して詩を詠む習慣は室町時代の五山僧の間で定着した。五山の一つ建仁寺で学んだ羅山にもそれは継承され、彼の詩集には、大量の試筆詩および周囲の人々との贈答詩を収めている。本作品は、この年閏正月があったため、その時にも詠み、二首並べて揮毫したものである。

『羅山林先生詩集』では卷十一・歳時二と卷三十二・典籍に分かれて収められ、一首目の「煙」が「曙」に、二首目の「開」が「門」、「慰」が「養」になっっているが、このうち「門」は版本の誤刻で、本作品の「開」が正しい本文であろう。また、一首目の注記は卷十一では「案上有公羊伝」とあって、本作品の「時読公羊伝」よりも臨場感がある。

「公羊伝」は、『春秋』の注釈書「春秋三伝」の一つで、獲麟(薪を採る者が麒麟を捕獲した)という記事を最後に置き、これが漢の高祖の出現を予言した(薪を採る者〓火徳を持った庶民〓劉邦)とされた。ここで羅山は、囲炉裏で赤々と燃え

る炭を麒麟（の角） 〓火徳に見立てて、孔子のように筆を揮うことができない老人には、囲炉裏の火をコントロールするの
が精一杯だ、と自嘲し、また『春秋』の重要概念である名分論を茶化して、（名と実が一致せず）余分があることを非難す
るが、閏月という余分はどうなのだ、『春秋』にもあるではないか、と問うている。囲炉裏の炭を麒麟の角に見立てる表現
は、同じ慶安元年に、水戸徳川家の当主頼房の試筆詩をたまたま読んでその韻に和したという詩（卷十三・歳時三所収）に
も「炉裏紅麟是角端」という句で用いられている。

一・二とも、羅山といえは思い浮かぶ、特徴的な書風で書かれている。しばしば悪筆とされる羅山であるが、隸書の書法
を取り入れ、止めや払いの最後まで神経を使い、一字一字明確に記すのは、かなり意図的なものと言えよう。おそらくは、
蘇軾・黄庭堅に代表される、鋭い線と大胆なデフォルメがある宋代の書風を取り入れた五山僧たちのそれと、明確に一線
画そうとする意識が働いているのであろう。このことは、五山から離脱して近世の学問を樹立しようとする意識と無縁では
なく、むしろその積極的な発現と捉えるべきではないか。この書風は、子の鶯峰、孫の鳳岡にも引き継がれている。

【翻刻】（句ごとに改行し、読み下し文を付した）

戊子元旦

時読公羊伝今茲余歳六十六（時に公羊伝を読む、今茲余が歳六十六なり）

東海煙霞梅柳春

六旬有六歳華新

手亀不試聖人筆

撥獲紅爐火徳麟

正月閏朔

啼鳥開花是友于

啼鳥 開花 是れ友于

東海の煙霞 梅柳の春

六旬有六 歳華 新たなり

手 亀かがまりて聖人の筆を試みず

撥おさ獲とたり 紅爐 火徳の麟

況添一月慰微軀 況んや一月を添へて微軀を慰むるをや

余分貶処道名分 余分 貶する処 名分を道いふ

試問春秋有閏無 試みに問はん 春秋に閏有りや無しやと

夕顔巷叟(印「羅／山」)

四 林羅山筆詩懷紙 (江戸初期) 写 七 436

本紙三二・四×四七・四種。伝来不明。『羅山林先生詩集』には収めない。上質の楮打紙に記す。

詩は「丹楓映斜日」という五言句を題にした五言絶句で、前半二句に五言のうちの四字をそのまま用いている点は、平安時代の句題詩の詠法に沿っている。後半二句では、よく知られた故事「故郷に錦を飾る」を踏まえて、この夕陽に照らされて一段と美しく照り映える楓をかざして故郷に向かう人が誰かいないものか、とまとめている。なお、詩懷紙の書法でいえば、題・署名の位置は定型どおりであるが、前作品と同様、本文は句ごとに改行している点は異なる。ただし三行三字は七言絶句の場合なので、五言絶句については特に定めはない。

【翻刻】(句ごとに改行し、読み下し文を付した)

賦丹楓映斜日詩(丹楓斜日に映ずといふことを賦する詩)

道春

丹楓恰似錦 丹楓 恰も錦に似たり

四面映斜陽 四面 斜陽に映ず

誰挿一枝去 誰か一枝を挿して去り

相輝向故郷 相ひ輝きて故郷に向かはん

五 林羅山筆和歌懷紙〔江戸前期〕写 七40
本紙三二・六×四七・六糎。弘化三年（一八四六）大倉好斎極札附属、蓋裏に平成二年（一九九〇）小松茂美極（打付書）あり。

和歌懷紙の定型を守った書き方をしている。文字は万葉書（仮名の字母を崩さず楷書に近い書体で記す）を交え、そこには漢詩文の揮毫と同様の特徴が出ている。

【翻刻】

詠水辺青柳和歌

道春

ぬるみそふ春の川水染つらむ色ものときき青やきのいと

六 〔林道春書簡〕〔江戸初期〕写 092
ト107

本紙三二・三×四四・八糎、端下部に欠損があるが、文字には懸かっている。奥はぎりぎりまで化粧裁したためか、「道春」の左端部分が一部欠けている。表装・箱ともに近年のもので、伝来不明。

星を祭る密教修法である北斗七星法を自ら行おうとして、それに詳しい僧侶に宛てた質問状。北斗七星あるいは九曜のうち羅喉星・計都星について、自分が所属する星である属星・大属星のことなど、基本的な質問をした上で、「大属星法」「北斗七星法」の次第書を所望している。

宛名は欠けている。「以参可申上所」とあるように、面会できる距離にいた人物で、かなり親しくしていた様子が文面から窺える。羅山とは連歌・詩歌などでの交流も深かった文殊院応昌（一五八一～一六四五）などが候補になるうか。応昌は

慶長後半には駿府に滞在して家康に近侍し、寛永四年（一六二七）には家光から浅草に土地を下賜され、文殊院を開いている。ここがたびたび林家を初めとする当時の文化人たちの文雅の場として使われた。⁽²⁾

【翻刻】

猶々今日急ニならぬ御事にて候ハ、明日中にうけ給候へ者、満足仕候。

其已来、以書中不申上候。御無事御座候哉。此方無相替義候。然者、近日拜北斗申度事御座候。就其不審事申進候。

一 北斗ト申ハ、七星ノ内ニテ候ヤ。但、七星ノ外ニテハイツレノ星候ヤ。

一 羅喉星・計都星ノ内ニテ候ヤ。惣テ此両星ハイツレノ星候ヤ。

一 属星ノ法ト申候ハ、本命星ヲ本ト仕候ヤ。

一 大属星ノ法ト申候時、七星又ハ、いつれくを入申候ヤ。

一 常ニ北斗七星ヲ拜スト、いつれくニテ御座候ヤ。

右条々、以参可申上所ニ、ちと急ニうけ給度存候間、目六御書付にて承度存候。同は、大属星ノ法次第、北斗七星ノ次第、拜見仕度存候。以上 恐惶謹

廿日 道春

七林羅山筆書状〔江戸前期〕写 セ32-2

本紙三二・〇×四五・〇糲。端裏書が見えるよう、表装の裏地を一部開けられるようにしてある。南光坊天海宛の書状と推定されている。

同じくセンチリー赤尾コレクシヨンの二条為氏筆書状（セ32）の付属文書として伝来し、別に軸装されたもの。「点を付」は通常、漢文に訓点を付すことを言い、たとえば中世の禅僧の墨蹟に江戸時代の禅僧が訓点を施した翻字が付されている

ることがあるが、この場合、候文で書かれている為氏書状についてそれをしたとは考えにくい。何か別の漢文作品を指して「書付」と言っているのではないか。したがって為氏の付属文書とされているのは、伝来の過程で別々のものが結びつけられた可能性もあろう。筆跡は、他の書状に比べると、楷書を書くときの独特の書風に近いものが見える。

本作品を含め、以下四通の書状には花押が据えられているが、いずれも形が異なる。年代によって変化しているとすれば、作品の成立時期を推定する手がかりになるが、まだそこまで検討が及ばない。

【翻刻】

(端裏) ㄨ南 僧正様(人々御中) 道春

即刻

被仰付候書付共、点を付進上仕候。安間之御用ニ御座候。昨朝者御立寄千万辱奉存候。被仰候通、従余所之様ニ申上候へは、一段能あなたニ(關字)御合点被成候。可被成厥足謂候。昨晩も書状進候へ共、御他行之由候キ。恐惶謹言

八月七日 道春(花押)

八 林羅山筆消息〔江戸初期〕写 七 1533

本紙二九・五×四一・〇糶。伝来不明。

端裏の宛名が擦り消されていて読めないが、内容からすると京に住む羅山の旧知の人物で、ほとんど敬語も用いない文面からは、親しい間柄であることが伝わってくる。

【翻刻】

(端裏) ㄨ<□□>□□老(貴報)

民部卿法印 道春

尚々御氣分弥能候由、珍重之至候。以上

先日者御尋久々にて申談、令祝着候。炎天之時分、其上何角手透無之、無音此事候。適々之下向ニ候所、意外之至候。いつ比可為帰京候哉。随而是式ニ候得とも、团扇一本踏皮三足進入申候。聊表書中候。何も期面上候。恐々謹言

六月廿七日 道春（花押）

九 林羅山筆書状〔寛永一三年（一六三六）〕写 七 1968

本紙三四・三×五一・一糎。小笹喜三箱書あり。

センチュリー文化財団による考証で、宛名の鳥居小路式部卿は青蓮院門跡の坊官鳥居小路経音、門跡は尊純法親王、呪願文は寛永一三年（一六三六）四月に行われた日光東照宮落慶法要で尊純自身が読み上げたもので、五月三日に江戸に帰着したところを狙って借りたもの、と判明している。高貴な身分の人を名指しするのを懼り、坊官宛としているが、実質的には尊純宛である。

【翻刻】

〔端裏〕〔「本来ここにあつた宛名を表奥に切継」〕民部卿法印 道春

尚々先以昨日者御登城目出度存候。以上

一昨晚之呪願文返進仕候。此方校合仕忝存候。御請取所仰候。仍是式却而如何存候へとも、時分之物ニ候間、帷子三之内単物志進上仕候。御門跡様へ以御次可然様ニ御披露頼入候。何も期伺候之節候。恐々謹言

五月九日

〔鳥居小路式部卿殿〕 道春（花押）

一〇 林羅山筆書状〔江戸初期〕写 七 2453

本紙三三・〇×四六・三糎。蓋裏に「五雲取藏」、蓋裏および本体裏地に古筆了伴極（打付書）、蓋裏の極に「五雲老常什」とあるので、五雲なる人物の所蔵時に了伴に鑑定を求めたのであろう。また昭和二六年（一九五二）古筆了信極札附属。

宛先は古筆鑑定を家業とした古筆家初代了佐である。了佐が江戸滞在中に出されたものであろう。七に近い書風を示す。

【翻刻】

以上

芳札披閱、忝候。然者昨日御仕合能御暇出申候。御息達迄種々拝領、御大慶之由得其意候。尤存候。近日御登候ハん由、い
つ比ニ而候や、承度候。猶期面上之節候。恐々謹言

即刻 道春（花押）

（端裏切継）了佐老御報 道春法印

〔注〕

① 大島晃ほか（五以降は漢文学研究会編）「羅山隨筆抄訓積稿」（一〜四）『漢文學解釋與研究』九〜一二、二〇〇六・一二〜二〇
一一・九、五〜十』『上智大学国文学科紀要』三四〜三九、二〇一七・三〜二〇二二・三）は、この「隨筆」一（卷六十五）か
ら八（卷七十二）までの抄出・注釈であり、次号以降本書を含む卷七十三の掲載が期待される。

② 石川真弘「興山寺応昌の文学活動について」（『密教文化』六二、一九六三・二）、廣木一人「榊原忠次・政房の池之端屋敷とそ
の文芸圈」（『榊原家の文芸 忠次・政房・政邦』科学研究費補助金研究成果中間報告書、二〇一七）

〔付記〕

一は第三四回慶應義塾図書館貴重書展示会「文人の書と書物―江戸時代の漢詩文に遊ぶ―」（二〇二二年一〇月）に、三はセンチュリー文化財団寄託品展覧会「文人の書」（二〇二〇年十一月）に、六はオンライン配信授業FutureLearn Sino-Japanese Interactions Through Rare Books（二〇一七年）で紹介した後、センチュリー文化財団寄託品展覧会・特殊文庫連携展示「本の虫 本の鬼」（二〇一九年六月）に、それぞれ出品し、図録には稿者が解説を執筆した。本稿はそれらと重複する部分がある。なお、セで始まる請求番号の作品は慶應義塾所蔵・斯道文庫保管センチュリー赤尾コレクションのもので、Keio Object Hubで画像が公開され、センチュリー文化財団所蔵時代に作られた解説が付されていてそれを参照したが、翻字等について一部改めたところがある。